

	記	述	目	録	
		落	穂	拾	い

日本古来の格闘技である相撲は、外国産のボクシングやレスリングなどとはちがって、ウェイト制を採用していない。むしろ相撲の醍醐味は体の大きさに関わりなく、限られた土俵のスペースを利用して勝敗をきめることにある。

最近、朝日新聞「国際天気図」で白井健策氏が触れているように、日本に帰化して話題となった高見山関が、巨軀をほりながらときには軽量級の力士にあっけなく苦杯を喫するのも、多分に土俵のスペースと関係がありそうだ。ほかの力士が4、5歩さがって土俵ぎわで踏んぱるところを、彼は2、3歩さがれば土俵を割るからである。巨漢高見山関にとっては、日本人の体格にあわせた15尺(4.545m)—江戸後期から昭和6年までは13尺—のスペースは狭すぎるのかもしれない。

\*

現在、図書館で使用している目録カードは、7.5×12.5cmの国際標準サイズのものである。この標準サイズは、1886年にM・デュエイが当時の米国の郵便葉書(3×5inch)と同一にするように提案したことに由来する。だが果して、これがわが国の目録記入に適切なサイズか疑問である。多くのカタログは土俵の狭さという点で、高見山関と同じ苦勞を味わっているからである。

印刷カードを眺めている限りではさほど

でもないが、実際に日本語の目録データを記入してみると、アメリカの郵便葉書のスペースでは如何にも狭く感ずる。また、日本語と同じ大きさでローマ字を印字したときの、間延びした、しまりのない文字面は両者の文字の寸法の差異を裏返しに示すものではあるまいか。アルファベットのための生活空間に日本語を押し込めるのは、やはり無理のように思われる。日本語には、その文字に見合った別個の生活空間があるはずである。

\*

この差異は、目録の機械化によって、いっそう際立って顕わになった。たとえば、バイト系のコンピュータでは、普通、英数字の1字を表わすのに1バイト(8ビット)を使用するが、漢字については倍の2バイト(16ビット)を要する。当館の和図書システムでも、二つの記号体系を併用しているのである。この点は、英数字のみで事足りる欧米諸国からみれば、なかなか理解しがたいことのようにだ。鉄道にたとえるならば、いつも標準軌の鉄道に慣れたしんでいるアメリカ人が、狭軌と広軌の入り混ざったインドの鉄道に出会ったようなものだからである。

\*

コンピュータによって従来、隠されていた文字の生活空間が顕在化されたともいえるし、技術文明の先端をゆくコンピュータの世界においても、文字という文化の基層に踏込むと、相変わらず明治以来の二重生活につきまとわれる、ともいえよう。

(収集 整理部国内図書課長補佐

野村文保)